

## ●島州一展『原寸の美学』によせて

### 行為表現から絵画表現へ



19世紀的絵画理論から人間性復活の芸術を目指した20世紀の前半であったが、その実験も一段落した時期に、私も自分の実践してきた行為表現を造形作品、とりわけ2次元の絵画に帰結させる為に、国内の美術事情より脱する必要から文化庁海外派遣員となり、それまでのしがらみから自由になった。

1980年、何もないパリのアパルトマンの一室で、とりあえず始めた表現が、粘土を板に指で塗り付け、その上に和紙状の紙をのせ、コンテでこすり出すフロタージュであった。できた形の余白を指で取り去り、2次元のオブジェのパターンをつくった。現実のどのような場所でも展示できる額縁のない絵画をつくることになった。

しかし行為の痕跡のパターンを並べるだけでは私の理想とする絵画ではなく、画面に何をどのように描くかを探求することになった。

行為の痕跡を絵具でコピーしながら自分独自の形を発見する中で、言語が生まれる瞬間に着目し、それと造形言語が生まれる瞬間を重ね合わせて、「言語の誕生」というシリーズを17年間ほど追求し、自分独自の絵画理論より画風をつくった。

それに平行して、浅間山麓に生きる広大な空間感を絵画にしようと風景シリーズが続けている。その追求の過程で、この土地に密着して生きる実感を作品にする新作シリーズのトレーシングシャツが誕生した。

浅間山と私のシャツが同じ価値とエネルギーの構造を持つという証言の作品となった。

2011年9月9日

島州一